

意欲的にゲームに参加する児童を育成するバスケットボールの指導の工夫

—基本的なパス技能の確実な習得とサポートの動きを身につける学習を通して—

体育・保健体育班 佐藤 則行（小学校教諭）

【児童実態】 ○運動に対する苦手意識が強い ○ボールに触りたいが、どうやってボールをもらったらよいか分からない

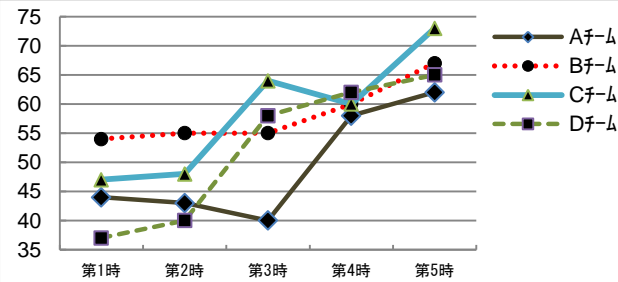
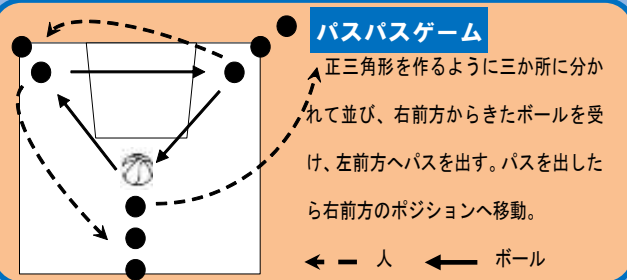
研究のねらい

バスケットボールの指導において、パスに関わる技能を高め、パスを受けることのできるポジションへ移動する動き（サポートの動き）を指導することで、児童が意欲的にゲームに参加することができるようになることを、実践を通して明らかにする。

ドリルゲーム

ステップ1

ある技能を高めるために行うドリル練習にゲーム的要素を加え、意欲的に練習に取り組めるようにしたもの。



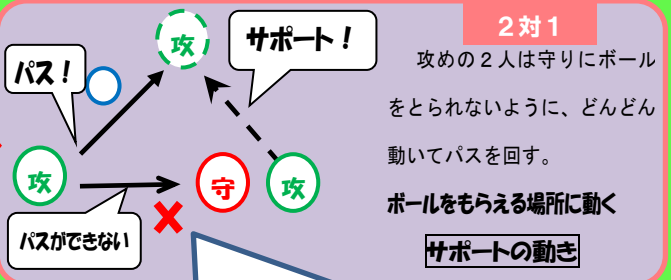
パスパスゲームでのパス回数の高まり(回)

チーム対抗で回数を競わせることで練習に対する意欲が持続した。

タスクゲーム

ステップ2

学習すべき課題が明確で、その課題が頻繁に学習できるように人数やコートサイズのミニ化を図ったり、ルールの緩和を図ったりしたもの。



(児童)「ボールを持つ人とディフェンス、ボールをもらう人の三人が一直線に並んでしまうとパスが出ない」

3対2 (ハーフコート)

サポートの動きを使って3人で攻める。守りは2人。2対1とは違い、パスだけでなくシュートを狙うというも目的が加わりゲームに近づける練習になる。

4対3 (オールコート)

サポートの動きを使って4人で攻める。守りは3人。オールコートになることで、ハーフコート3対2よりさらに実際のゲームに近い練習になる。

まとめのゲーム

★パスを回さなければならない状況を意図的につくるとともに、攻め側が有利になるようなルールを設定。

ステップ3

○子どもたち自身で審判ができるようにし、みんなで協力しながら楽しくゲームを運営。

★ボールを持っている人から1m以上離れる。

○審判は自分たちです。

★ドリブルは1回のみ。

○「ナイスシュート！」応援も全力です。

★全員がシュートを決められたらボーナスポイントを与える。



児童の感想から

私は始めの頃ボールがこわいし、ボールが自分ところこないから、バスケットボールはつまらないスポーツだと思っていました。初めて試合をしたとき、ボールをさわっている人とさわっていない人がはっきり分かれていました。でも、だんだんチームの人みんなでボールを回すようになり、私もボールにさわられるようになりました。今ではボールがこわくなくなり、バスケの時間が楽しみになりました。

成果

研究の成果と課題

課題

- 基本的技能を習得する場面でドリルゲームを取り入れることにより、意欲を継続させながら反復練習をすることができ、個人技能を高めることができた。
- サポートの動きを身につける場面でタスクゲームを取り入れたことにより、ボールをもらうための動きが身に付き、パスをつなぐ意識も高めることができた。
- 身に付けた技能を活用しながらルールの工夫をしてパス中心のゲームを行ったことにより、児童一人一人が意欲的にゲームに参加することができた。

- アウトナンバーでサポートの動きの練習を行った後、4対4の同数でゲームを行うことでボールをもらうことができなくなる児童が見られた。同数のゲームの中でも必ずアウトナンバーができるようなルールや場づくりが必要だと感じた。
- パス中心のゲームにするためにドリブルの制限を設けたが、競技の特性を考えると、ドリブルの有効性や楽しさも感じながらパスを多用するようなゲーム展開になるような指導の工夫も必要だと感じた。